



「審議まとめ」から

自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手の育成

『好き』（興味・関心）を育み、『得意』を伸ばす」と
「当事者意識をもって、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」の両輪の必要性・関係性

- ◆ 第1に、AI などデジタル技術の発展により、定型的な仕事の代替が進む中、皆と同じことができることにも一定の意義はあるが（全ての基盤になる基礎学力、規範意識等）、それ以上に独自の発想や視点に価値創造の源泉がシフトしつつある。また、不登校児童生徒の多くが自分が好きなことや知りたいことを突き詰める学びを学校に求めている。少子化に伴う入試による動機付けの低下、学習時間の減少等も踏まえ、学びの動機付けをアップデートする必要もある。こうした中、「自らの人生を舵取りする力」を育成するためにも、『好き』を育み、『得意』を伸ばす中で、それらを原動力として学び全体への動機を高めていくことの重要性が増している。



- ◆ 第2に、グローバルな人の移動により人口の多様性が増すとともに、SNS や AI の負の側面による社会分断の可能性、経済的格差の拡大等も指摘されている。こうした中、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させる必要性が高まっており、多様な他者と出会う場である学校で当事者意識をもって、自分の意見を形成し、対話と合意ができる「民主的で持続可能な社会の創り手」を育成する重要性が増している。
- ◆ この二つの方向性の関係は次のようなものと言える。「好き」を育み、「得意」を伸ばし、その子らしい個性が伸長され、自分なりの意見や観点をもつようになれば、多様な他者と当事者意識を形成し、対話や合意をする必然性が生まれてくる。逆に、対話や合意に特化した学習活動を行おうとしても、普段から自分なりの意見や主張、それらを効果的に他者に伝える経験を積んでいなければ、円滑に進まないことが想定される。
- ◆ 今後の社会は、多様な他者が協働しながら複雑な課題を解決していくことが不可欠となる。そうした社会をイメージするとき、『好き』（興味・関心）を育み、『得意』を伸ばしながら、それらを原動力として学び全体への動機付けを図っていく取組と「当事者意識をもって、自分の意見を形成し、対話と合意ができること」は、いずれも重要かつ密接に関連したものであり、次期学習指導要領では、これらが相互に有機的に関わり合い、両輪として高まっていく教育課程を実現する必要がある。

